

<p>浄土真宗 瑞林寺 坂井輪 墓苑だより</p>	 <p>無量壽 (親鸞聖人御真筆)</p>	<p>第46号 平成22年8月1日 発行人 〒951-8133 新潟市中央区川岸町1丁目48 (相沢企業内) 坂井輪墓苑管理事務所 TEL 025-267-9402</p>
---------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



〈写真提供〉
鈴木薫著
「蓮花」鈴木薫写真集
発行 株式会社ラトルズ

榎本栄一
詩集「煩惱林」より

いのち終わるまで
いっしょに暮らし
おのづと別れる
煩惱なれば
今は大事に
見まもりませ

煩惱さま

お盆のご案内

※ローソク・線香は墓苑にて常備しております。

お花の予約

八月十三日、お花の用意をしております。
なるべく予約でお求め下さい。

予約電話番号
平日 二六七七一九四〇二
当日 二六〇一五二四九

墓前読経

十三日のみ承ります。
午前八時半より午後六時まで

年間管理料口座振替

まだ手続きされていない方で、用紙を無くされた方は、お申し出下さい。送付致します。

瑞林寺の案内

朝のおつとめ

あさの梵鐘六時、本堂の「おあさじ」の始りです。お参り下さい。

年間の行事

- 九月二十三日 秋のお彼岸法要 永代経法要 無量壽廟法要
- 十一月 六日 親鸞聖人さまの「報恩講」
- 一月 八日 初お講
- 一月 元旦 お年始まいり
- 二月 二十八日 春のお彼岸法要
- 三月 十八日 寺お講(法中講)
- 五月二十八日 光輪会総会
- 七月 三日

永代供養のお墓

無量壽廟のご案内

境内本堂前に平成十四年、瑞林寺開基四百年記念に建立しました。
どなたも使用できます。

あとがき

- ◇人間の最後、死にむけて葬儀やお墓のことがらの準備の事をこのごろ「終活」というそうである。就職活動を就活、結婚活動を婚活という言葉にならつての造語であろう。
- ◇終活本といわれる書籍や週刊誌がぞくぞく発刊特集され、新書判の「葬式は、要らない」はベストセラーになり話題をよんだ。
- ◇仏教は「人生は苦なり」という釈迦の認識から、どう苦を超えて永遠のやすらぎを得ることができかに答えるに始まった。
- ◇この人生苦を大別して四苦八苦といい、四苦とは生老病死をさす。高度成長のときはいかに生きるか、生の問題であったが次第に時代は、老苦・病苦の年金、医療介護問題から死苦へ焦点が移っている現代だ。
- ◇死苦だけは本人の宗教心の問題であり、後の始末は本人は不可能、他人様に頼るほかないことだけは事実で、しかも行政も及ばぬ世界だ。

島田裕巳著の「葬式は、要らない」を読む

瑞林寺前住職 廣 澤 憲 隆

最近「葬式は、要らない」という島田裕巳の本がベストセラーズとなり話題になりました。現代の葬儀事情を葬儀社から寺院の裏舞台まで丸裸にする、センセーショナルなタイトルと内容に読まれた方も多いと思います。わたしも浄土真宗の僧侶の一人として読んだ感想を述べる責任があると思います。一、二記してみました。一言で申せば、この本は特別なことをいっている訳でなく、現状の実態の報告と受けとめました。

ただ著者が大学で教える宗教学者でありながら、人間の「生と死」という人生の最も厳粛な葬式の本質的意味を問う姿勢よりも、切り口がお金がかかる、かからないという極めて金銭的、物質的価値観のものさし中心であるところに、批判する業界や宗教界と同じ穴の類いの視点での週刊誌的筆法に極めて現代の世相を表れているといえます。ともかく、現代の関心事がお釈迦様の説かれる「生老病死」の苦しみが次第に生→老→病→死と、問題の比重、深刻さが最後の死苦に移行しつつあることに時代の流れを感じます。

わが遺体は加茂川の魚のえさに

浄土真宗の宗祖、親鸞聖人は「それがし閉眼せば加茂川の魚に与うべし」と遺言したと伝えられています。真宗の教えは「信心定まるとき、往生はさだまる」

現在の救いですから、臨終の善し悪しはまったく論外です。肉体の滅するとき煩惱も消え、心は仏の世界、お浄土に遊ぶことが阿弥陀さまに約束されており、大切なのは平常にその確信「信心」を得ることが第一の課題であつて葬儀式は二次的のこととされております。もちろん聖人亡きあと、残された門弟たちはその遺徳をしのび葬儀を行い、お墓(本廟)をつくり、その恩徳に報いる法要、報恩講をつとめました。真宗のお寺では毎年の報恩講は門徒にとつて一番大切な法要であり、明年は親鸞聖人七百五十回忌という五十年に一度の大法要、御遠忌が京都の各本山でつとまり、全国から何十万人のお参りが予定されています。

法名と俗名と戒名

浄土真宗では仏弟子としての名前が「法名」であり、真宗以外の宗派では戒名といいます。また法名にたいして親からもらった名前が俗名です。これは生前に仏弟子になる「帰敬式」(おかみそり)を受け仏の弟子としての名前をいただく。これが「法名」です。仏の弟子ですのお釈迦様の「釈」をいただいで「釈〇〇」となります。生前にそのご縁を逸した人に、新しいいのち、仏としての誕生の名前として命名されるのが位牌の法名です。

真宗では元気なうちに帰敬式を受けて法名をいただき、現世とちがつて仏様のお浄土は平等の世界ですから、院・殿とか居士大姉号はつけないのが原則であつて、世間でいわれる「法名料」というようなことはありません。どこまでも御仏前とお布施で気持を表現します。

聖典を読む

親鸞聖人の

正信偈の二箇所 (8)

能発一念喜愛心
不断煩惱得涅槃
凡聖逆誘齐回入
如衆水入海一味

〈よみかた〉

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆誘ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるが如し。

〈意味〉

ひとたび弥陀の本願を喜び信ずる心を起せば、われわれのかかえる煩惱を断ち切る必要がなく、煩惱の身のまま仏の境涯に立つことができます。煩惱にいろどられた凡夫も、立派な聖人もひとたび念仏の信に立つならば、ちよとど汚れた濁流の川も澄んだ清流の川も海に注げば、

大海では海の潮は一味に溶けあうように、お浄土の平等の世界にだれでも同じく生まれることができます。

煩惱は生活なり

心を煩わし、身を悩ます種子を煩惱といい、それは限りなく百八の煩惱とも数えられ、貧欲・怒り・愚痴の三毒の煩惱で代表されます。この煩惱を断ち切つて、こころも身体も清浄になることが悟りを開いて仏に成る修行です。

この修行の方法にいろんな宗教や宗派が生まれ、また広くは修養や道徳も心や身を整えて、立派な人間に近づくといい心でしょう。

煩惱を断滅しこの世で聖者となることを目指す理想にたいし、現実には生活苦の矛盾をかかえていきなればならない私たちにとって、煩惱とは生活そのものです。

臨終の一念まで不安や恐れ、疑いの煩惱は消えませぬ。煩惱だらけの身のまま一生を終える人生、そんな理想と現実の矛盾をかかえる人間には、到底仏への道は閉ざされます。

ここから親鸞聖人のお念仏の宗教、浄土真宗がはじまりました。

凡夫が仏に成る

人間は未完成どころか、理想に遠く、仏に背き反逆するような矛盾に満ちた生活の人生を送るのが現実です。

神や仏は人間に善行や徳目、修養や信心を要求します。それに合格した人は自他ともに満足がえられるでしょうが、不合格、不満足で神や仏からも見放される人は永遠に苦しみの世界から脱出できません。

阿弥陀仏の大悲の本願はいのちあるものへの平等の愛です。

煩惱にふりまわされる人生に喜べない、自分をダメな奴、自分を認めることのできない人にこそ最愛のわが子として愛をそそがれる阿弥陀仏です。一人でも苦しむものがあるかぎり、安心できないと切々なる訴える親心が阿弥陀仏さまです。この阿弥陀仏の愛の祈りが南無阿弥陀仏となりました。

この阿弥陀仏の願いを喜び信ずる心がひとたび起れば、凡夫も聖者も等しく絶対安心の世界に生まれることができます。